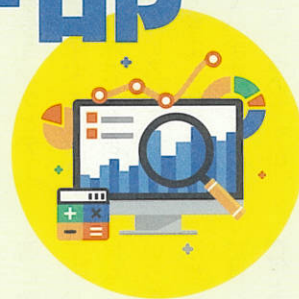




特集2

School of Social information Science

社会情報科学部 学生に聞く



令和の始まりとともに創設された社会情報科学部。
今回は現代社会で重要度が増す
データサイエンスを担っていく学生たちと座談会を企画。
志望動機、学生生活、社会情報科学という学問、
生成AI等の多岐にわたる質問で学生たちの本音を聞いた。

- 出席者 ■ 松位 美咲 さん(1回生)
■ 世古 花純 さん(2回生)
■ 阿部 太郎 さん(3回生)
■ 原田 拓磨 さん(4回生)
■ ホアン バフン さん(4回生)
■ 村上 耀紀 さん(編集委員・2回生)
■ 寺崎 桃杏奈 さん(編集委員・2回生)
- 聞き手 ■ 「淡水」編集委員 森 大介 (学部45回)
■ 「淡水」編集委員 西村 ひとみ (学部33回)



School of Social Information Science 社会情報科学部 学生に聞く

—— 社会情報科学部を目指した理由を教えてください。また、実際に入学して学んでみてどのようなことを感じましたか。

■村上 社会情報科学部はプログラミングに強い学部で、1回生では情報の扱い方や情報セキュリティの基礎を学び、2回生になった今はだんだんとプログラミングの内容が難しくなってきた段階です。自分のやりたいことが社会情報科学部の湯本先生の研究と合っていたので入りたいと思ったことがきっかけです。今はまだ2回生なのでやれることが少ないのですが、ある企業様からデータをいただいで、売上向上について情報面から提案するPBL演習は他の大学にはない強みです。研究内容についても医療や文字認識などいろんな分野があることがこの学部の特長だと思います。

■原田 コンピューターがもともと好きで、いい学部が兵庫県内にないかと探していたら、新しく県大に社会情報科学部ができると聞いて、決めました。社会情報科学部は、データと社会を結びとこ

るに強みを持つているので就職先にも困らないだろうかと考えました。特に、2回生での授業はいろんな分野に触れる機会があり、データと社会をつなぐ具体例がたくさん提示されるので、そこで自分に合った分野を見つけられるのではないかと思います。現在は医療系の研究をしているのですが、それぞれの研究分野について詳しい先生がたくさんいらっしやることも強みではないでしょうか。

■世古 私は高校では文系でした。社会で役に立ちそうなことを学びたいと思ったときに、文系の学部では直接役に立ちそうな学部がないなか、データサイエンス系の学部で学べば社会に出てもそれを生かせる気がして社会情報科学部に入りました。入ってからは、企業からデータももらいそれを基に分析できるところが良いなと思っています。

■阿部 ぼくは情報コンピューターやITに興味があって、いろいろな学部を見ていたところ、情報を取り扱っている学部の一つに社会情報科学部があり



■松位 美咲 さん(1回生)



■世古 花純 さん(2回生)

ました。当時だいたい話題になっていたデータサイエンスに力を入れていることを知って、興味を持って入学しました。データサイエンスについては、データをパソコンで分析するのかなというイメージをなんとなく持っていたのですが、実際に1、2回生でPBL演習に取り組んでみて認識が変わりました。ただデータを見るだけではなく、そのデータを基にいか

他の大学と連携して研究できる点も社会情報科学部の特長だと思います。

■松位 わたしはもともと工学部に進もうと考えていたのですが、工学部イコール機械のイメージがあつて自分と合うだろうかと不安になっていたときに情報という学問を知りました。情報の学部で良いところがないかなと思い、高校の情報の先生に聞いたときに勧められた大学の一つが県大の社会情報科学部でした。実際にオープンキャンパスに行ってみてすごくいいなと思ったので受験を決めました。

—— PBL(問題解決型学習)演習が社会情報科学部の目玉の1つだと思いが、1・2回生の皆さんは実際にPBL演習をしてどのように感じていますか。

■松位 1回生前期の基礎演習で発表する機会があつて、データを基にまとめたのですが、先生からコメントで非常に痛いところを突かれました。でも痛いところを突かれることでその部分は自分がまだ足りていないところなんだということが分かって、そこを調べればもっといい発表ができるかなと思えました。また、PBL演習ではイオンフードスタイルさんのデータを事例に学んだのですが、先生がこのお店はこういう商品を多く売っているから参考になるのではと教えてくださって、そういう視点で深いところを調べなければいけないのだということが分かって、大変だけれども楽しみながらやっています。

■ホアン 情報技術について興味を持って勉強をしたいなと思つて近畿地方でそれが学べる大学を探していました。県大の社会情報科学部は、ただプログラムを学ぶだけではなく、プログラミングとデータを使って問題を解決するということが入学案内に書かれていて興味を持ちました。実際に入学してみても、いろいろな分野について知ることができました。今は画像系の研究室に入っています。そこで明治大学と共同研究をしているのですが、

■村上 回転ずしチェーンのスシローさ

んからデータを提供していただき、多数の店舗のある日の売上情報のデータを基に分析を行います。例えば家族連れ、あるいは1人で来られているお客様がどのようなメニューを好まれるのかを把握したうえで、売り方を提案したり、駅から近いといった店の特徴を把握しながら、どうすればもっと売上につながるのかを考えます。

—— スシローさんの担当者の方も授業には来られるのですか。

■村上 担当の方は初回、中間、そして最後の計3回いらっしゃいます。最初の講義ではスシローさんのデータについて説明があり、中間の授業ではほくたちの中間発表の提案に対してフィードバックをしていたら、最後の授業では1チーム5人の計20チームに分かれて全体発表を行い、それに対して評価をいただいています。視点が各チームで全然違うので、提案力が試されます。スシローさんはただ学生の意見を聞くだけではなく、問題点をしっかりと指摘してくださるのでありがたい機会だと思います。

■世古 PBL演習の面白いところは、他の授業のように決められた課題が与えられるのではなく、データだけ渡されてあとは自由に自分たちで考えて提案をしていいところです。それが面白いけれども難しいところだとも思っています。

—— 3回生の阿部さんは昨年されたPBL演習はどうでしたか。



■阿部 太郎 さん(3回生)

■阿部 昨年のPBL演習でもスシローさんのデータを基にした授業を行ったのですが、最終発表では、提供されたデータから予測ソフトをプログラミングで作成し提案を行ったチームもいれば、提供データのほかに政府のオープンデータも併用して提案を行ったチームもあったりと本当に多様な視点からの提案がありました。スシローさんから、その視点についてあまり考えたことがなかったといった反応をいただいていた班もありました。わたしたち学生としては実際のデータを基に現実のビジネスに近い形で課題に取り組める良い機会でもあり、スシローさんにとっても新しい発見に気づく機会になっているのではと感じています。

—— 3、4回生のみなさんは、専門研究や卒業研究の真最中でしょうが、1、2回生でPBL演習を経験したことが生かされている点や異なっている点などありますか。

■原田 1、2回生の時は、データの取り扱いから始めて、そこからそれらのデー



■原田 拓磨 さん(4回生)

タをどう使うかを授業で習った後にPBL演習で実践を学びます。それから3、4回生では専門分野に分かれていくこととなります。PBL演習を経験してよかったですと思うのは、データから課題を見つけて解決することです。例えばこの家族連れが注文するお寿司の傾向を調べたうえでどうアプローチするかといったようなことを学ぶことができました。

3、4回生の研究では、データから問題を把握してそこに対してどうアプローチするかというPBL的な観点と、もう一つはアルゴリズムを考慮した本格的なプログラミングを行う、2つのアプローチがあります。僕は前者の、問題点に対してどのようにアプローチするかという切り口のほうに興味を持っています。それはPBL演習を経験できたからだと思います。

PBL演習と、3、4回生になってからの研究の違いは、研究はかなり専門的になって、自分のテーマに沿ったデータを自分で集めなければならず、データを

集の方法から考えなければいけないのと、使うプログラミングの言語や手法も変わってくるので、適宜それらを自分で収集し、理解して使わないといけないことです。PBL演習のときは先生に教えてもらった技術を使って進めていったのですが、3、4回生では使う技術を自分で考えなければなりません。

■ホアン 1、2回生のPBL演習は、データ分析をしてその分析結果から解決を導くのですが、3、4回生になると、ただデータ分析をするだけでなく、データ収集法とか機械学習、深層学習などを使うようになります。例えばわたしは3回生のときに、マスクを着用しているかどうかを判断するプログラムを作ったのですが、ただ画像を収集するだけではなく、画像を変換してまた学習するというプロセスを取り入れました。学習するというプロセスを取り入れるところは1、2回生との一番の違いだと思います。

■阿部 PBL演習はビジネスとして実際に活用できるかどうかに着目していたのに対して、3、4回生で行う研究は、どちらかというと学問的な観点に比重が置かれ、新規性があるかどうかに着目して取り組んでいるような印象があります。自分の場合はPBL演習を通して分析の手法について学べる余地があるなど感じることができました。例えば最近ではAIの活用が急速に進んでいます。当時はAIに関する知識がほとんどなかつ



School of Social Information Science 社会情報科学部 学生に聞く

たので、そういった理論も取り入れながら取り組むことができていると感じています。

——例えば、クルマの仕組みが分からなくても運転できるように、データサイエンスについても皆さんが研究開発されていることがいずれ私たち一般の人でも自然に利用できる時代が来るのでしょうか。

■原田 はい。僕は今、電子カルテのデータを分析して、医療従事者の業務が効率化できるようなシステムを研究しているのですが、まさにプログラミングやデータサイエンスに触れたことのない医療従事者や患者さんでも恩恵が受けられるようなシステムを作っているところです。

■ホアン 今研究しているのは、生物学の研究者では分かりにくい形を分かりやすい形に変換することで研究に貢献できるシステムです。やはりプログラミングが分からない人でも使えるように考えています。

——社会情報科学部では大学院に進む学生が多いと聞いていますが、皆さんの院

に対する考え方はどんな感じですか？

■原田 私は院に進学予定です。3回生のゼミの配属が決まった後の3回生の前期の終わりぐらいだったでしょうか。ゼミの研究が医療と決まっただけから、専門の人と話をしながら自分のテーマを見つけ、研究していくプロセスがあるのですが、その過程で自分のやりたいことのために足りない点がたくさん出てきて、それでは院でしかできないなと思うようになりました。そこで3回生の前期終わりぐらいから担当していたいている先生の院に進もうかな、と考えました。3回生になるまでは院には進まなくてもいいかなと考えていたのですが、ゼミに入って研究演習をするうちにやりたいことが出てきたという感じですね。

■ホアン ぼくは院には進まず、帰国して就職することになっています。3回生の終わりごろのタイミングで院に進むか帰国するかという二つの選択がありました。院に進むことに決めました。研究したいことがあって自分の知識が足りな



■ホアンバフンさん(4回生)

いなと思うのであれば、3回生の終わりぐらいに決めたら良いと思います。原田さんが言われるように、ゼミに入って実際に研究してみるとさらに勉強したいなという気持ちになっていきます。実際に院に進む人が僕の周りに結構多いです。研究したくなかったら就職する人もいます。

■阿部 私は院に進学予定です。卒業研究の期間は1年間あるのですが、そのうちの最初の方はどういう問題に取り組むかを考える期間に充てるので本格的に取り組むのは後半になってからということになります。となるとあと2年追加してしっかりと研究に取り組みたいなと思いました。

■原田 学部内に理系と文系が結構混ざっていて、文系上がりの人は結構就職が多くて、理系で入ってきた人は院に進むというイメージがあります。院に進む学生の割合は3、4割くらいでしょうか。

■ホアン 確かに研究室によって違うかもしれません。理系関係の研究室で学んでいる学生は院に進む人が多いように感じます。

■村上 全体的に社会情報科学部の先生は院への進学を勧めてきますね。ただ先輩たちの話を聞いていて思うのは、研究室によって院に進むのか進まないのかという差は大きくて、ある研究室では9割方行くけれど、ある研究室では全員就職するというように分かれているのかなと

いうイメージは持っています。

——大学院終了後のイメージはどんな感じでしょうか。

■阿部 自分の場合は院で学んだことも含めてそれを社会に実装できればいいなというイメージを持っているので、主に情報系の企業だったり、そうでない企業であったとしても情報やデータの分野で関われるところがあれば目指していきたいと考えています。

■村上 今度3回生になるにあたって先生の研究室を訪問させてもらったのですが、そこで話を聞いていると、院に進まれている方で、皆が知っているような大企業に就職している人は割と多いと感じました。ただ、そもそも4回生で卒業される方でも、プログラミングの力がある人で就職する方もいらっしゃるって、良い企業に就職されています。

——県立大学は兵庫県に住んでいる学生については学費を無料にするということを発表して話題になっています。このことは現役学生の皆さんの考え方にも影響していますか。

■村上 はい、その話題は皆関心を持っています。例えば大学院に進むつもりがなかった学生の中にも学費が無料なら行くのかなと言いつつ始めている人もいます。

■松位 学部で卒業するより大学院に進んで学んだ方がその分技術力がプラスアルファでついてくるっていうイメージがあります。先生方も口を揃えて院に進む

うと言っています。その理由については、さらに2年間学ぶことで技術力がプラスされるだけでなく、4年で卒業した時の就職よりも、院に進んでから就職した方が良い会社に就職できる、ということを言われます。そういう話を聞いてみると、今から院に進めば無料になるし、無料で技術力がついて就職も有利になるのだったら進まない選択肢はないなと思います。

—— 今日集まっていたみなさんは理系が多いように思うのですが、理系、文系の人が混ざる割合が多い学部に入って何か感じることはありませんか。

■松位 入学してからは理系の色が濃いなと感じていて、プログラミングをする際に入れるコードをどういう条件にしたらいいかか脳内で整理するのがまだ大変です。あとはエラーが出てきたときに英語で出てくると、わたしはあまり英語が得意ではないのでいちいちなんて書いてあるのだからと毎回確認するのがちょっと大変ですね。数学も微積分や線形代数などどれひとつとっても、高校の数学とは違って1次元、2次元ではなく無限大の次元まで勉強するので脳がパンクしそうですね。今頑張れば2、3回生以降の授業で役立つのだからと思うって負けずに頑張ろうと思っています。

■村上 文系の人が最初に苦しむのが「社会情報科学のための数学」という授業です。高校の数Ⅲにあたる授業で、前期の半年間に高校1年間で学ぶ数Ⅲを週1回

ペーアの授業でまとめて学ぶのでそこで洗礼を受けて苦しんでいる学生の声はよく聞きます。ぼくは理系で数Ⅲが好きだったので大丈夫でしたが、いざ入ってみると苦しんでいる学生が多いと感じています。

■世古 数Ⅲの範囲だけであればそんなに難しいというわけではないので、覚えればできると思います。確かに「社会情報科学のための数学」の授業だけは理系と文系で差が出るかもしれません。他の授業については問題ないと思います。

■松位 社会情報科学部はやはり理系の色が強くて、知り合いの中には文系から来ている学生で、特に数Ⅲを全く勉強していない人は「何それって言いながらすごくテンパっている姿を見ることがあります。

—— 数学の基礎知識が必要だと思うのですが、実際3回生以上の方は専門分野に進んでみて感じることはありませんか。

■阿部 数学はプログラミングと似ている部分があるように思います。例えば微積分であればどの範囲をどうすることで解くのかという課題解決力が身につくと



編集委員
■寺崎 桃杏奈さん

けでは済まず、その一行がどういう仕組みで動いているかというところまで理解する必要があります。そういったことを突き詰めていくと、元の論文を読むのに数学的な素養が必要かなと思います。

—— 今日集まってもらった皆さんの話を聞いているとものすごく勉強されているのだなと感じますが、学部生全体の雰囲気もこんな感じですか(笑)？

■村上 プログラミングは詰めていけば詰めていくほど問題は見つかるし、やりたいことも見つかるのでやる人はどんどんやる感じですね。与えられたものに関して興味を持って深掘りしていく学生はほとんど上に上がっていくし、与えられたものだけをやっていく学生もいます。

—— 教授との距離感はいかがですか。

■阿部 すごく近いですね。現実だけでなくネットでコミュニケーションを取れる先生もいます。問題がわからないときに研究室を訪ねると、一緒にラーニングコモンズ(学生が自習等で使う共用スペース)まで来て教えてくださる先生もいらっしやいます。

■ホアン 研究室のメンバーが研究内容を考えるときにも、先生と先輩とが親身になって相談に乗っている姿を見ます。

—— 就職の指導についてはいかがですか。

■原田 就職担当のセクションから進路を教えてくださいとか、エントリーシートへの書き方で悩んでいる人があれば相談



編集委員
■村上 耀紀さん

に乗ります、といった連絡は来ます。先生からは就職先の情報について聞くことはありますが決めるのは自分ですね。

■阿部 社会情報科学部では Teams というアプリを使って先生と会話ができるのですが、そこには先生から進路の情報について結構密に連絡が入ってきます。何年卒向けにインターンシップを紹介しますが、こういうインターンシップのサイトがいいですよといった情報がこまめに入ってくるのでありがたいなと思います。就職先に関しても親身になって考えてくださいます。ご自身の研究ばかりに打ち込んでいる先生は割と少ないと感じています。

—— ガラッと話は変わりますが、部活やアルバイトなど勉強以外の学生生活はどのような感じですか。

■ホアン 部活はバトミントンをしていました。アルバイトはいくつもしましたが、長く続けたのは人材紹介会社での翻訳のアルバイトです。

■世古 わたしは小学生にプログラミングを教えるアルバイトをしています。

■村上 わたしは母校の高校でアルバイトをしています。周りを見ると割と家庭教師とか塾講師が多いイメージがあります。

■阿部 ぼくは研究室のお手伝いをたまにアルバイトとしてやっています。

■松位 キャリアサークルというサークルに入っています。キャリアセンターが

顧問になっているサークルです。企業さんが実施する販促コンペの提案に参加して楽しんでいます。特に活動がないときは、簿記の勉強をしています。サークルの顧問の先生がキャリアセンターにおられるのですが、簿記に詳しい方なので教わっています。大学が主催するイベントにも積極的に参加しています。

■原田 軽音部に入っているのですが休みの日はその練習をしたりもしますが、結構だらだらと過ごしています。アルバイトに精を出している学生もいます。ぼくは塾講師のアルバイトをしているのですが最近の研究の方が忙しいのでそんなに入っていません。

—— ほかの学部や大学との交流はどんな感じですか？

■村上 部活が一緒であれば別ですが、社会情報科学部は社会情報科学部、国際商経学部は国際商経学部で固まっているイメージがあります。PBL演習等企業様からいただいたデータは学部棟外への持ち出しが禁止されているので、どうしても学部内で同じチームでいる時間が長くなってしまいがちです。

■阿部 周辺には神戸市外大や神戸芸工大、流通科学大があり、違う大学でも部活は交流があると聞いています。

■松位 学部を超えて比べると、例えば看護学部は長期休み期間に実習があったり、理系の学部は実験をやらなければいけないこともあるようですが、社会情報



科学部は夏休みがしっかりとれるところは良いなと思いました。

■村上 4回生になると夏休みでも研究室にこもる人が増えてくるイメージはあ

School of Social information Science
社会情報科学部
学生に聞く



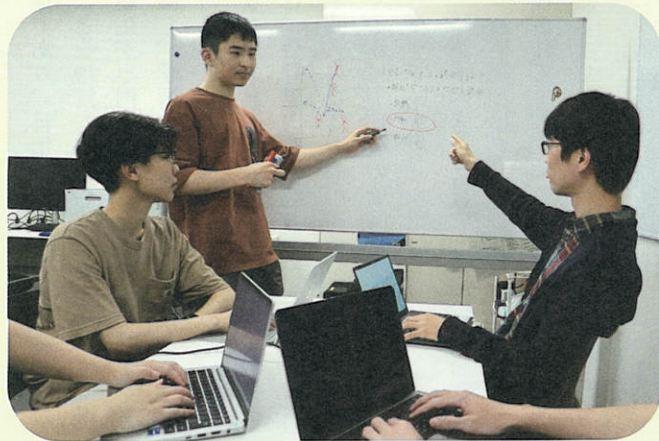
りますね。1、2回生に関しては、夏休みは部活するか、遊ぶかみたいな感じで、ザ・大学生みたいな生活を送っている学生もたくさんいます。

——さてもう一度話を戻しまして、みなさんが学んでいる社会情報科学という学問は5年後、10年後どうなっていく、またデータサイエンスの分野は将来どんなふうに進んでいくと考えますか。

■阿部 想像しづらいところではあります、神戸商科大学の時代からオペレーションズリサーチのようなカリキュラムがもともとあって、今のデータサイエンスにつながってきているのだと思います。手法については少しずつ進歩していつているのかなと思いますし、5年後、10年後にはできることがさらに幅広くなっていくのではないのでしょうか。ただ基礎的なところはそこまで大きくは変わらないのではないかと思います。

■ホアン 最近話題になってる生成AIは、こういう画像を描いてくださいと言えばそういう画像を描いてくれます。仕事でいうと、デザインのところも絵を描くところも、英訳、音楽のところまでもが全部AIで制作する時代になってくるでしょう。独特の技術を持っているような人以外は仕事をなくしてしまうのかなと想像します。

■原田 チャットGPTや超高性能AIが発展してきているので、データサイエンスに対しての捉え方がちょっと変わっていくのかなと思っています。今はデータを自分たちで分析してそれを解決するために自分たちでシステムを作っているのですが、高性能AIが出てきたことで



何でも頼んだら作ってくれるようになってきつつあります。データサイエンスとはデータをどれだけ扱えるかを重視しているわけですが、今後は用意されているデータがあつてそのAIをどう使うか、自分のやりたいことに対してチャットGPTをどのように適応させ、どうビジネスに役立てるかという発想が求められるようになってくるのだと思います。

■世古 5年後、10年後は、多くの人が簡単にデータサイエンスを使えるようになってきているのではないのでしょうか。AIにあまり詳しくない人でも、データを使って結果を簡単にらせるようになってきていると思います。

——これからAIが進化していくとたくさんさんの仕事が失われていくと言われていますが、データサイエンスの世界で活躍していく皆さんはもう一つ上の次元の段階へと進んでいくというイメージなのでしょうか。

■原田 AIのベースはほぼ同じでも種類については画像生成などたくさんあつて、そこへ特化させていくことが結構難しいのでその技術は求められるようになっていくと思います。今はデータを使ってビジネスに生かす手法が重視されていますが、データサイエンスの世界においては、コンサル的な役割よりも、社会問題に対して今あるAIをどう特化させるかという方向にソフトチェンジするのではないかなと感じています。

——みなさん社会情報科学部に入って充実した学生生活を送っておられるなと感じました。最後に、これから大学選びを始める高校生やその保護者の方に対して伝えたいことがあるとすればどんなことでしょうか。

■原田 高2、高3になって進路を考えるようになって、自分は何をしたいのだからと考えるタイミングが来て、そこから大学を探し始めると思います。社会情報科学部は、そこで学ぶ内容に興味を持った学生であれば学びががあると思うのですが、関心がなくてただぼんやりと選んでしまった学生にとっては面白くないかもしれません。先生方も理系の先生は

かりなので本気で教えにくるのでしんどいなと思うときがあるかもしれません。コンピューターが好きだったり、データサイエンスを生かしてコンサルタンの仕事がしてみたいなという人には合うと思います。

■村上 不思議ですけど、社会情報科学部の学生はとにかく個性が強いなと感じます。癖が強い学生を見たら、あ、この学生は社会情報科学部の学生だろうなと思うほどです。おそらく社会情報科学部の学生は明確にこれを極めたいという考えを持って入学してくる学生が多いからではないかなと思っています。そういう人には居心地のいい学部だと思います。

——今日は長時間の座談会に参加いただき本当にありがとうございます。淡水会には皆さんのOB、OGがたくさんおられますし、国内外にたくさん支部があります。例えば神戸支部であれば2カ月に1回昼食を食べながら情報交換をしています。学生のうちはまだ同窓会と言われてもピンと来ないかもしれませんが、皆さんは入学した時点から淡水会のメンバーです。優しい先輩方がたくさんおられるのでぜひ交流していただきたいと思っていますし、こんなことをしてほしいということがあればどんどん意見を募りますのでぜひ新しい取り組みを増やしていただきたいと思います。